台大日本語文研究第 23 期
2012 年 6 月，頁 49-74
2011-10-26 收稿，2011-12-05 通過刊登

芥川龍之介俳句之考察
——關於「歸隱的憧憬」「病痛」「感覺描寫」的俳句——

沈美雪*

摘要

芥川龍之介的俳句屬於「文人俳句」的範疇。芥川的俳句經歷依據「我的俳諧修行」一文所述，他在小學四年級時第一次嘗試十七字的創作。俳號「我鬼」的芥川雖然說「自己除了俳句之外別無餘技」，但是他的俳句作品已超越作家餘技的範圍，有著自己的獨特境地。而芥川的遺族以《澄江堂句集》當作香奠的回禮送給弔唁客人，其中收錄了芥川自己選取的俳句七十七句。芥川的名句中，受到好評的大多是典雅、具技巧的俳句；但是另一方面，以平實的手法紀錄日常生活中所思所感的俳句，更能夠窺探到芥川生活上的真實面貌。

本論文首先簡述芥川的俳句創作歷程，透過「隱遁的憧憬」「病痛」「感覺描寫」等三方面來分析芥川記錄日常生活的俳句，並同時探討芥川在俳句創作上達到的境界。

關鍵詞：芥川龍之介、俳句、歸隱的憧憬、病痛、感覺描寫

* 中國文化大學日本語文學系助理教授

A Report on Ryunosuke Akutagawa's haiku: By Keywords of "Admiration of Seclusion", "Disease", and "Sense Expression"

Shen, Mei-Hsueh*

Abstract

Ryunosuke Akutagawa's haiku belongs in the category of the haiku written by specialized authors. According to "My Painstaking Efforts in Haiku", he tried to compose 17-character haiku first time in the fourth grade. Although Akutagawa himself said that he had no trifling skills except haiku, he was far beyond a dabbler. It is said that many famous haiku of Ryunosuke Akutagawa had showed elegant skills. From the haiku which Ryunosuke Akutagawa composed straight to record his daily life, we can learn him further.

In the report, the haiku experience of Akutagawa is first sketched. Then the three aspects of "admiration of seclusion", "disease", and "sense expression" was inspected. The main purpose of the report is to research artistic conception of the haiku of Akutagawa as a haiku poet.

Keywords：Ryunosuke Akutagawa, haiku, admiration for the seclusion, disease, sense expression

* Assistant Professor of the Department of Japanese Language and Literature, Chinese Culture University

芥川龍之介の俳句に関する一考察
—「隠遁への憧れ」「病」「感覚表現」の句について—

沈美雪*

要旨

芥川龍之介の俳句は、いわゆる「文人の俳句」の範疇に入るもので、「わが俳諧修行」の一文によると、その俳句歴は、尋常小学校4年の時に初めて十七字を並べてみた、とある。また、俳号を我鬼とする芥川は「余技は俳句の他には何もない」と語ったと伝えられているが、その作品は、文人の単なる余技に止まるものではなく、独自の句境を展開しているものといえ、芥川の遺族が香典返しとして贈った『澄江堂句集』には、芥川自選の俳句77句が収められている。そして、芥川の有名句は典雅的で技巧の面において評価されるものが多い一方で、彼が日々つれづれに思いのままを書き記した句の方が、生身の人間としての芥川の素顔をうかがい知ることができる。

本論では、このような芥川の俳句について、その俳句歴を簡略に紹介した上で、「隠遁への憧れ」「病」「感覚表現」という三つの方向から芥川の日々の記録としての俳句を論じると共に、俳人としての芥川の句境の一端を検証することを目的とする。

キーワード：芥川龍之介、俳句、隠遁への憧れ、病、感覚表現

* 中国文化大学日本語文学科助理教授

芥川龍之介の俳句に関する一考察
—「隠遁への憧れ」「病」「感覚表現」の句について—

沈美雪

一、はじめに—芥川龍之介の俳句歴

周知の通り、龍之介は芭蕉に傾倒し、「芭蕉雑記」(大正 12-13 年)、「凡兆について」、「発句私見」(以上、同 15 年)、「続芭蕉雑記」(昭和 2 年)などの随筆や、芭蕉の死に際を描く短編小説「枯野抄」(大正 7 年)などを著しており、彼が蕉門俳諧に深く興味を持っていたことは明らかである。また、村山古郷が芥川を「古俳句の情趣的な世界を憧憬し、志向していた[1]」と評したように、彼が芭蕉などの古典を範とし、自選句集『澄江堂句集』に収録された作品に典雅で枯淡な境地を描きした句が多いのもその影響であろう。

我鬼[2]の俳号を持つ芥川の作句歴は「わが俳諧修行[3]」によると、尋常小学校 4 年の時に初めて十七字を並べてみた、とあり、その時に詠まれた「落葉焚いて葉守りの神を見し夜かな」は芥川の俳句処女作と見るべき一句である。この句は、夜に落ち葉を集めてたき火をしていたら、森の木々に宿ってそれらを守護する葉守りの神を揺れる火の光の中にちらりと見たような気がしたよ、という句意であり、幼いころの作品でありながら芥川の叙情性が垣間見られ、幻想的な雰囲気を伝える一句である。一方、中学校時代には特に目立った作句活動はなく、「獺祭書屋俳話」や「子規随筆」などといった正

---

1 村山古郷「我鬼珠玉—芥川龍之介の俳句—」(『日本文学研究資料叢書　芥川龍之介 II』有精堂、1977 年、pp.173-180)。

2 吉田精一は「俳号を我鬼と命じたのもこの年(筆者注：大正 6 年)からしく、十二月十一日下島勲宛の書簡にこの雅号がはじめて見えるが、この頃はあまり多用していない」(『吉田精一著作集　芥川龍之介 I』、桜楓社、1979 年、p.108)と指摘している。また、斉藤英雄「龍之介の『ホトトギス』投稿句について」(『漱石・龍之介の俳句』所収、翰林書房、2009 年、pp.103-122)によると、大正 7 年 5 月号の『ホトトギス』では「椒図」の俳号を、次に発刊された 6 月号では「我鬼」の俳号をそれぞれ用いている。

3 芥川龍之介「わが俳諧修行」(『芥川龍之介全集』第 12 巻、岩波書店、2007 年、pp.241-243)。初出、大正 14(1925)年 6 月 1 日発行の『俳壇文芸』。

岡子規の著作を愛読していたことが「わが俳諧修行」に記されている。そして、高校時代も、同級生に三汀と号する久米正雄がおり、芥川は彼や彼の属する朱鞘派の俳人たちの作品に興味を持ちそれらを読んではいたものの作句はほとんどせず、大学時代も同様であったという。

しかし、大学を卒業し、教師を始めた教師時代は「海軍機関学校の教官となり、高浜先生と同じ鎌倉に住みたれば、ふと句作をして見る気になり、十句ばかり玉斧を乞ひし所、「ホトトギス」に二句御採用になる」(「わが俳諧修行」)と、虚子から句の添削を受けたことが記されている[4]。そして『ホトトギス』での入選が芥川の作句に対する意欲をより一層刺激することとなり、大正 7 年 10 月 16 日付けの松岡譲に宛てた書簡では、「俳句は非常に上達して目下大に新進俳人気分を漂はせてゐるもし(う)菊池なんぞ眼中にない[5]」と、既に小説家として成功した当時の芥川の、俳句に対する情熱のほどを知ることができる。

その後、大正 8（1919）年に横須賀での教職を辞めて東京に帰って専業作家になった芥川は、「今日は唯一游亭、魚眠洞等と閑に俳諧を愛するのみ。俳壇のことなどはとんと知らず。又格別知らんとも思はず（中略）この俳壇の門外漢たることだけは今後も永久に変らざらん乎」(「わが俳諧修行」)と記している通り、作家業の合間に一游亭（小穴隆一）や魚眠洞（室生犀星）などの文人仲間と句作を楽しんでいたのである。そして、芥川は、高浜虚子や小沢碧童などの俳人に俳句の斧正を請うこともあるものの、ホトトギス派にも新傾向にも属さず、古典俳諧に学び独自の境地を開いたのである。

また、芥川の俳句を論ずるにおいて言及せねばならないのが書簡の存在である。なぜなら、彼の句のほとんどが友人や知人への手紙

---

4 東京・田端の実家に帰省中の芥川は、友人の菅忠雄に「鎌倉へ行ったら、高浜さんへつれて行って下さい句でもやつて閑寂に暮らしたいと思ひます」（大正 6 年 12 月 22 日付け書簡）と紹介を求める書簡を送り、菅の紹介により虚子に指導を受ける機会を得たのである。

5 大正 7 年 10 月 16 日付けの松岡譲に宛てた書簡(『芥川龍之介全集』第 18 巻、岩波書店、2008 年、pp.239-240）。菊池は菊池寛のことを指す。

に付随されていたからである。これについて、関口安義は「初期の頃は詩や短歌が手紙の一部として用いられ、それは次第に俳句にとって代わられる。歌や俳句の採用は、龍之介書簡に文学的香りを添えることになる[6]」と、芥川書簡の形式上の特色の一つとして、詩や、和歌、俳句が手紙の一部に用いられていることを指摘している。この点を踏まえ、本論では、書簡を引用しつつ芥川の俳句の創作背景を説明し、また鑑賞の基盤にする。

なお、初めて芥川龍之介の俳句を集めた書物として、彼が没した5年後に出版された西谷碧落居の著書『俳人芥川龍之介論』(立命館出版部、1932)があり、約560句が収録されている。このほか、村山古郷の『芥川龍之介句集 我鬼全句』(永田書房、1991)も約1014句を収録しており、また、最新のものとしては、2010年に出版された加藤郁乎編『芥川竜之介俳句集』(岩波書店)が俳句1159句を収録している。この『芥川竜之介俳句集』は、句数として最も充実したものであり、本稿ではこれを底本とする。

二、隠遁への憧れ—「草庵」のイメージ

芥川の句といえば「395 青蛙おのれもペンキ塗りたてか」(句の前に記した数字は底本の通し番号である。以下、同じ)、「1114 蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな[7]」など、着想の新しさや新奇な比喩などで評価される有名句が想起される。だが、彼が折にふれ、実生活に基づいて感じたことをつれづれなままに詠んだ作品の方が、芥川の俳人としての面目躍如たる一面をうかがい知ることができるであろう。そして、本論では、その日常生活を描く句について、「隠遁への憧れ」、「病」、「感覚表現」といった三つの面から分析し、芥川俳句の特色と表現の手法を究明したい。では、まず、芥川がずっと抱いていた草庵や隠遁者に対する憧れを俳句に詠んだ作品を取り上げて論じることとする。

---

6 関口安義『芥川龍之介の手紙』(大修館書店、1992年、p.4)。

7 「蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな」は『澄江堂句集』に収められた一句であり、大正7年の作品「323 鉄条に似て蝶の舌暑さかな」(大正7年8月号の『ホトトギス』「雑詠」欄)に推敲を重ね改稿したものである。

大正 5（1916）年に東京帝国大学英文学科を卒業した芥川は、一高時代の恩師である畔柳都太郎の紹介で、横須賀の海軍機関学校に教授嘱託として同年 12 月に就任した[8]。この教職生活は大正 8(1919)年まで続いた[9]が、芥川は田舎教師の仕事がよほど嫌いであったらしく、友人の小島政二郎に宛てた書簡で、「もし僕が東京へ舞い戻れる機会があったら然る可く僕の為に運動してください目下愈々地方の小都会気風がいやになってゐる所ですから[10]」、「愈々来月から田舎教師職がまた始まるんだと思ふとうんざりします[11]」など、その心情を吐露している。そして、このように東京に帰りたい思いが日に日に強まる中で、芥川は次の一句を記している。

328 ふるさとを思ふ病に暑き秋[12]

これは、大正 7 年の作であり、生まれ育った東京が恋しく懐郷病に罹ったときの心境を素直に語った一句である。そして、大正 8 年 2 月に薄田泣菫の尽力により大阪毎日新聞社への内定が決まり、芥川は翌 3 月に海軍機関学校を退職、教師生活にピリオドを打ったのである。そして、念願の退職が決まった芥川は、その高揚する気持ちを次の一句に表している。

451 帰らなんいざ草の庵は春の風[13]

ここに示した一句は、大正 8 年 2 月 23 日付けの小島政二郎に宛てた書簡に初めて見られるものだが、薄田泣菫（2 月 24 日付け）、下島勲（同 3 月 3 日）への書簡にも記されており、東京に戻れることや作家業に専念できることを、彼がどれほど喜んでいたのかが分かるものである。また、この句はいうまでもなく、陶淵明の「帰去来

[8] 宮坂覚「年譜」(『芥川龍之介全集』第 24 巻、岩波書店、1998 年、pp.35-244)。
[9] 大正 8 年 2 月に大阪毎日新聞社への入社が内定になったために芥川は 3 月に海軍機関学校の教師生活に終止符を打った。また、この内定の待遇は、出勤の義務がなく月給 130 円のほかに原稿料とボーナスを支給するなどであった。
[10] 大正 7 年 8 月 27 日付けの小島政二郎に宛てた書簡（全集第 18 巻、pp.231-232）。
[11] 大正 7 年 8 月 30 日付けの小島政二郎に宛てた書簡（全集第 18 巻、pp.232-233）。
[12] 前注参照。
[13] 大正 8 年 2 月 23 日付けの小島政二郎に宛てた書簡（全集第 18 巻、pp.269-270）。

の辭」の冒頭の一文「帰りなんいざ。田園将に蕪れなんとす」を念頭に置いた作品である。そして、大阪毎日新聞社に入社する際に芥川は「入社の辞」一文を草し、「春風は既に予が草堂の簷を吹いた。これからは予も軽燕と共に、そろそろ征途へ上らうと思つてゐる[14]」と、自分を「帰去来の人」と称し、気乗りのしなかった教師業から解放された心境を述べると同時に、専業作家に身を投じた抱負と期待を語ったのである。また、似たような心境を詠んだ句には「我鬼句抄補遺」に収録された、「教師をやめる、八年」と前書をしてある「452 君琴を弾け我は落花に肘枕」の一句がある。ただ、ここでの「君」は、友人に対する呼びかけに違いないが、具体的に誰のことを指すかは記されていない。しかし、句意は明瞭であり、友人に琴を弾いてくれと呼びかけ、自分は肘枕をしながら散りゆく花を眺め、琴の奏でる曲に耳を傾ける、といった風情を詠んだものであろう。もちろん、これは実景を描いた句ではなく、陶淵明のような、昔の詩人や隠士の生活をイメージして作ったものである。そして、生活のために苦痛を感じながらも仕方がなく続けてきた教職から解放され、ようやく自由になった喜びを、古代の隠遁者にでもなったような心持ちで俳句に表現したのである。

また、芥川は前掲の「451 帰らなんいざ草の庵は春の風」の句のように、「草の庵」「草庵」「庵」「草の戸」「草の家」などの、わび住まいをイメージする言葉を愛用している。例えば「157 野分して屋根に茅なき庵かな」、「259 わが庵の上啼き渡れ月の雁」「271 草の戸や来ん殿待つて高燈籠」（以上、大正 6 年）、「655 わが庵や鴨かくべくも竹柱」（同 9 年）、「887 草の家に柿十一のゆたかさよ」（同 12 年）などのほか、以下に挙げた句も、そのような句の一つである。

646 庵の秋蓬平ならば山描かん

上掲の句にある「蓬平」は日本画家・佐竹蓬平[15]のことであるが、芥川は大正 12（1923）年ごろより彼に関心を寄せており、その作品

[14] 芥川龍之介「入社の辞」（全集第 22 巻、pp.420-422）。
[15] 佐竹蓬平（1750-1807）は本名正夷、信濃出身の日本画家。蓬平は雅号。

を愛蔵している。そして、「蓬平の画拝見させて頂いて有難うございました朴厚な所があつて愛すべき画だと思ひます[16]」と、この一句を下島勲に書き送っている。周知の通り、芥川は昭和 2 年に薬を飲んで自殺したが、その際に妻の文に残した遺書には「五、遺物には小穴君に蓬平の蘭を贈るべし。又義敏には松花硯（小硯）を贈るべし[17]」の一文があり、このことからも、芥川が蓬平の画を愛蔵し、それを忘れ形見として親友の小穴隆一に贈りたいと考えていた、芥川の心遣いが読み取れる。

また、先に挙げた「646 庵の秋蓬平ならば山描かん」は、四季のうちで最も美しい景観を見せてくれるのが秋であり、もし、画家の蓬平がいたらば、庵にいながら秋の気配を感じ、木々の葉が極彩色に彩られた山容をきっと描くだろう、という句意である。そして、この一句は、句の調べもその趣向も、芭蕉の「芋洗ふ女西行ならば歌詠まん[18]」（『野ざらし紀行』）を想起させるものである。この句は、西行谷の麓にある水辺で芋を洗っている女達とその情景はいかにも風情があり、西行法師なら、きっと彼女たちを歌に詠んでいたことであろう、という意味である。つまり、芭蕉の句境を愛した芥川は、自身の真実をオマージュしたのである。

以上に見てきたように、「草の家」や「草の戸」、「草庵」という言葉が織り成すわび住まいの境地に憧れていた芥川であるが、芥川の養父・道章が田端に 2 階建ての家を新築し、大正 3（1914）年 10 月ごろに一家はそこに引っ越している。もちろん、現実の田端の家は「草の庵」というイメージとはかけ離れているが、中国の陶淵明、そして彼が敬慕してやまぬ芭蕉など、隠遁詩人の閑寂な生活ぶりに対する一種の憧れを、自分の住居を「庵」と表現することで表している。このように、芥川の作品には隠遁生活への憧れや隠遁者に対

[16] 大正 9 年 11 月 10 日付けの下島勲に宛てた書簡（全集第 19 巻、p.114）。
[17] 芥川龍之介の「遺書」（全集第 23 巻、pp.86-87）。
[18] 芭蕉は貞享元（1684）年 8 月中旬から翌年 4 月末まで、門人苗村千里を伴い「野ざらし紀行」（甲子吟行とも）と呼ばれる旅をし、「芋洗ふ」の一句は、その旅行中に得られた一句である。

する関心がたびたび語られているのである。

178 拾得は焚き寒山は掃く落葉

上掲の句は、「我鬼句抄補遺」所収の大正 6 年の作である。この句に登場する「寒山」、「拾得」は、中国天台山の山林に隠遁していたと伝えられる隠遁者の代表的な人物であり、そのとらわれのない姿が禅の理想を表しているともいわれる。そして、山水画では格好の画題とされるほか、文人にも好まれる題材であり、例えば、森鴎外や井伏鱒二といった文豪は、「寒山拾得」というタイトルの作品を著し、漱石も「寒山か拾得か蜂に螫されしは」とユーモアに溢れる一句を残している。

芥川もこの乞食風の二人に心を引かれ、大正 6 年ごろに執筆した「寒山拾得」と題する短編の中で、飯田橋で見かけた「髪も髭ものび放題で、如何にも古怪な顔つきをしてゐた」二人の男の「怪しげな姿が懐しく」なり、帰宅してから師と仰ぐ漱石に「今日飯田橋で寒山拾得に遇つたと云ふ手紙を書かうと思つた」と書いている[19]。そして、「寒山拾得」をもとに執筆したのが、大正 9（1920）年に発表した「東洋の秋」であり、文中には、寒山拾得の存在が自分の疲労と倦怠を「静な悦び」に転化させ、「懐しい古東洋の秋の夢」へといざなってくれた、と以下のように説いている。

> おれの心の中には、今までの疲労と倦怠との代りに、何時か静な悦びがしつとりと薄明く溢れてゐた。あの二人が死んだと思つたのは、憐むべきおれの迷ひたるに過ぎない。寒山拾得は生きてゐる。永劫の流転を閲しながらも、今日猶この公園の篠懸の落葉を掻いてゐる。あの二人が生きてゐる限り、懐しい古東洋の秋の夢は、まだ全く東京の町から消え去つてゐないのに違ひない。売文生活に疲れたおれをよみ返らせてくれる秋の夢は[20]。

このように、教師時代の仕事に忙殺された毎日といい、そして、教職をやめて創作に没頭した「売文生活」といい、いつも彼の心中

[19] 芥川龍之介「寒山拾得」（全集第 21 巻、pp.264-266）。
[20] 芥川龍之介「東洋の秋」（全集第 6 巻、pp.16-18）。

に去来するのは、隠遁者や隠遁生活に対する憧れであった。また、彼には扶養家族が多く、創作と文壇に縛られて晩年は身動きもできずに苦しんだ。そのため、このような芥川だからこそ、隠遁詩人の陶淵明や、僧の寒山拾得の、囚われない生き方に憧れたのではなかろうかと考えられるのである。

三、病の句

芥川が、その晩年において幾多の病に悩まされたことは周知の通りであるが、田端の開業医で芥川家の主治医であった下島勲（空谷）は、晩年の芥川の持病について、胃アトニー、痔疾、神経衰弱と診断していた。元来、丈夫なほうではなかった芥川であるが、その健康が著しく損なわれたのは大正 10（1921）年の中国旅行中である。特に、北京で腹を壊したことが引き金となり、以来、芥川は体調を崩しやすくなるなど、健康上の問題が彼を深く悩み苦しませたのである。

それゆえ、芥川には病をテーマとする句が多く、彼が俳句に詠み込んだ病気の種類は、体調不良や風邪による発熱と咳、胃腸などの消化器疾患、持病の痔、不眠症など実に多く、さらに、病とだけ記している句もたくさん残されている。ここでは、それらのうちから数例を取り上げて紹介しつつ述べたいと思う。

309　熱を病んで桜明かりに震へゐる[21]

425　熱の夜の長さに伯母を思ひけり[22]

まず、第 1 句であるが、これは大正 7 年 4 月 24 日付けで薄田泣菫に宛てた書簡に見られるもので、西谷碧落居が『俳人芥川龍之介論』で「何ら技巧を弄しない、生々しい実感の、仍つて可なり痛烈な迫

[21] 大正 7（1918）年 4 月 7 日付けの久米正雄に宛てた書簡。上五「熱病んで」、座五「震へ居る」（全集第 18 巻、pp.206-207）。同 7 年 4 月 24 日付けの薄田泣菫に宛てた書簡には「病中」と前書を付してある（pp.208-209）。また、『ホトトギス』大正 7 年 5 月号の「雑詠」では、下五が「震へ居り」となっている。

[22] 「424 身熱のうつらうつらと夜長かな」の句と共に「手帳 2」（1918-19 年ごろ）に収録されている。

力をもつ作である。爛漫と咲き盛る桜花蔭に立つ蒼顔を想像するがよい。そこに一種の鬼気さへ感ずるではないか[23]」と評価している通り、熱で震える病人の身体と桜の花盛りとの対比が非常に力強く表現されている。

次に、第 2 句についてだが、この句も大正 7 年ごろに詠まれたもので、句の中の伯母はその名をフキといい、芥川を養育した人である。芥川は大正年 2 月に塚本文と結婚し、翌 3 月に鎌倉の新しい借家に転居した。当初、伯母も同居していたが、翌月中旬に伯母は田端に戻っている（「年譜」109 頁）。また、大正 7 年は春からスペイン風邪が流行り、芥川もよく風邪を引き、諸症状に苦しんだという。病気になると最も親しかった人が恋しくなるというような感情は、誰しも一度は経験したことがあろうが、芥川の場合、子供の時に親代わりに世話をしてくれた伯母のことを最も自然に思い浮かべたのである。そして、高熱に魘された長き夜にふと育て親のこの伯母を思い出した、という意のこの句を詠んだのであろう。また、この句の推敲する前の形「424 身熱のうつらうつらと夜長かな」は、高熱をじっと耐え、うつらうつらに感じた夜の長さが素朴な筆致で描写されている。

以上は「熱」をテーマとした句であるが、このほかに、体調不良や風邪などを詠んだ作品として、「426 秋蚊帳の中に咳する病者かな」、「427 氷嚢や秋の氷のゆるゝ音」、「428 頓福の新薬白し今朝の秋」「429 秋立てばまづ咳をする病者かな」（以上、大正 7 年）、「449 病間やいつか春日も庭の松」、「485 病室の膳朝寒し生玉子」（以上、同 8 年）などがある。このうち、ここでは「咳」を主題とする次の一句を取り上げて論じたいと思う。

353　胸中の凩咳となりにけり[24]

この句は、気管支がぜいぜいと鳴ることを凩（木枯らし）と表現

[23] 西谷碧落居『俳人芥川龍之介論』（立命館出版部、1932 年、p.329）。
[24] 大正 7 年 11 月 2 日付けの高浜年尾に宛てた書簡（全集第 18 巻、pp.244-245）。「我鬼窟句抄」に「三汀（論者注：久米正雄の俳号）の病を問ふ我亦時に病床にある」と注記がある。また翌日の 11 月 3 日は小島政二郎に「病中髣髴として夢あり退屈だから句にしてお目にかけます。凩や大葬ひの町を練る」（全集第 18 巻、p.245）と書き送っている。

した句である。芥川は、大正 7（1918）年 11 月 2 日付けの高浜年尾に宛てた書簡に「僕は今スペイン風でねてゐますうつるといけないから来ちゃ駄目です熱があって咳が出て甚苦しい[25]」とインフルエンザにかかったことを報告している。もっとも、「胸中の凩咳となりにけり」とはいささか大げさな感じもしなくはないが、「胸中の凩咳と」なるところに芥川の叙情性と表現力が存分に発揮されているともいえ、また、同じ着想と思われる以下のような一句もある。

818　凩や薬のみたる腹工合[26]

この句は、大正 11 年 12 月 17 日付けの真野友二郎に宛てた「唯今北海道のホツキ貝と云ふものを食ひ、胃の具合怪しければ早速頂戴の薬をのんだところ」とした書簡に添えられたものである。芥川は句に「凩」を用いることも多いが、この場合は、実景の凩（木枯らし）よりも薬の作用による強烈な腹痛を「凩」として例えているものである。先に述べた芥川を悩ます健康問題であるが、その一つに胃腸の弱さが挙げられる。この一句は、治療薬を服用したために胃腸の鳴りが腹の中で木枯しのように吹き荒んでいる、という意であり、この句からも芥川の切実な病苦が読み取れよう。

さらに、持病の痔疾も芥川を苦しませた病気の一つである。彼が大正 10 年 9 月 8 日付けで薄田泣菫に宛てた書簡には、「小生の胃腸直らずその為痔まで病みだし」と記されており、胃腸の問題が痔の発作を引き起こしたようである。また、大正 10 年 9 月 13 日付けで下島勲に宛てた便りでも、「この間の下痢以来痔と云ふものを知り恰も阿修羅百臂の刀刃一時に便門を裂くが如き目にあひ居候」と、激しい痛みを訴え、次の一句を書き送っている。

707　秋風や尻ただれたる女郎蜘蛛[27]

この句は、上五は切れ字の「や」で切り、下五は体言止めと典型的な形を取っているが、芥川にはこのような調べの句が多い。「ただ

[25] 大正 7 年 11 月 2 日付けの高浜年尾に宛てた書簡（全集第 18 巻、pp.244-245）。
[26] 大正 11 年 12 月 17 日付けの真野友二郎に宛てた書簡（全集第 20 巻、p.206）。
[27] 大正 10 年 9 月 13 日付けの下島勲に宛てた書簡（全集第 19 巻、p.193）。

れる」は、皮膚や肉が破れ崩れることであり、また、女郎蜘蛛は夏の季語ではあるものの、ここでは芥川は秋風のもつ情趣をより重要視したと思われ、秋風がこの句の季語であろうと考えられる。そして、女郎蜘蛛がお尻から糸を噴出することを、書簡にあるような「便門を裂く如」くに見立て、痔の痛みを「ただれたる」と表現しているのである。

このほか、芥川は、大正 15 年に湯河原から山本有三に送った手紙では「その後胃腸は悪いし神経衰弱は強いし、痔は起るし、大いに閉口唯今ここに半病人生活を送ってゐる[28]」と自身の不調を訴えている。そして、世俗の悩ましいことや、神経を極限まで研ぎ澄まして小説の執筆にかかったことが彼を疲れさせた。そのようなストレスが胃腸の不調を齎し痔もますます悪化するなど、数々の肉体的苦痛に精神を蝕まれつつあった彼は、以下のような句を詠んでいる。

284　利きおそき眠り薬や藤鬱(ママ)と
1113　かひもなき眠り薬や夜半の春

「利きおそき」は大正 7（1918）年 1 月 25 日付けで久米正雄に、「かひもなき」は同 15（1926）年 12 月 5 日付けで下島勲のそれぞれに宛てた書簡に記されている句である。これらの句の表現を辿っていくと、大正 7 年には「利きおそ」いもののまだ効果が期待できる「眠り薬」が、同 15 年ごろには芥川にとって既に「かひもな」いものになってしまったという、表現上の変化が見られることに注意したい。

眠り薬の使用については、大正 7 年 11 月 24 日付けの薄田泣菫に宛てた便りで「この頃神経衰弱甚しく睡眠薬なしには一睡も出来ぬ次第」と告白しているように、この時期において、彼は既に睡眠薬なしでは眠れない状態になっている。また、当時の心境として「僕の神経衰弱の最も甚しかりしは大正十年の年末なり。その時には眠りに入らんとすれば、忽ち誰かに名前を呼ばるる心ちし、飛び起き

[28] 大正 15 年 1 月 15 日付けの山本有三に宛てた書簡（全集第 20 巻、p.206）。

たることも少からず[29]」と、ようやく眠りに入ろうと思ったら幻聴で目が覚めてしまい、陰気な毎日を過ごさざるを得なかったことも記されており、「利きおそき眠り薬や藤鬱(ママ)と」は、そのころの芥川の事情を克明に記録したものといえよう。

さらに、芥川は晩年において、肉体の衰弱と極度の神経衰弱に悩まされており、不眠症もますますひどくなって、「小生は二月近くの不眠症未だに癒らず、二晩ばかり眠らずにゐると、三晩目は疲れて眠るには眠るが、四晩目は又目がさえてしまふ[30]」、「睡眠薬の量はふえるばかり[31]」と自ら記している。このように、重度の睡眠障害が原因で身も心もボロボロとなった芥川だが、特に大正 15 年ごろは睡眠薬すらあまり効かず、やむを得ず使用量を増やしたものの、それでも眠れぬ時が多かったようで、「かひもなき眠り薬や夜半の春」は、彼が抱える深刻な悩みを克明に描き出した一句といえよう。

そして、寝返りを繰り返しながら夜が明けようとするのを迎える芥川の苦しみを、巧みに凝縮して俳句という形で表現しているものに『澄江堂句集』に収められた以下の句がある。

1117　あかつきや蜾なきやむ屋根のうら

同句について、「我鬼抄」では「病中」と前書を付した上で「赤ときや蜾なきやむ屋根のうら」の形で掲出され、おそらくそちらが初稿であろう。また、蜾はカマドウマの古名であり、芭蕉にも「海士の屋は小海老にまじるいとどかな」の句があるが、ここではコオロギを指す（全集第 10 巻、312 頁）。そして、芥川は随筆草稿「冬心」において、この句の背景を次のように語っている。

> 自分はこの秋も神経衰弱に罹った。この秋もと云ふのは一昨年の秋、支那見物から帰つた時にも、やはり同じ病の為に三月ばかり苦しんだことがある。今度のはその時の程重いのではな

[29] 芥川龍之介「病中雑記－「侏儒の言葉」の代りに」、大正 15（1926）年 2-3 月発表（全集第 13 巻、pp.190-194）。
[30] 大正 15 年 1 月 20 日付けの佐々木茂索に宛てた書簡（全集第 20 巻、pp.209-210）。
[31] 大正 15 年 5 月 9 日付けの山本有三に宛てた書簡（全集第 20 巻、p.233）。

い。が、睡眠剤を用ひない限り、眠られないことは同じだつた。又睡眠剤を用ひたにしろ、二時か三時に目覚めたなり、天明を待つことは稀ではなかつた。「赤ときや蝉啼きやむ屋根の裏」――自分は寝返りを繰り返しながら、かう云ふ句を作つた覚えもある[32]。

このように、睡眠薬があまり効かず数時間で目が覚めてしまい、夜明けを長々と待ち続けながらコオロギの音を聞き、そうしているうちに鳴き声がぴたりとやんだ、その瞬間をはっきりと知覚した芥川は、極限の状況に置かれていた自分自身を直視して俳句という形で表現していたのである。

以上のように、芥川は胃腸の病や痔を患い、さらには精神を病んで幻覚症、不眠症などで「鬱々として日を暮らすこと多」く、「気違ひになる前の心もちはかかるものかとさへ思ふことあり」(「病中雑記」)とも記していて、自分の病気と発狂してしまうのではないかといった精神状態を切実に語っている。そして、ここで取り上げた三句から、睡眠障害で苦しんでいた芥川の日常生活の切実な苦しみが読み取れるのである。

四、感覚表現の句

俳句は、詠み手が身をもって感じた自身と自然とのかかわりを五音・七音という言葉のリズムを通して言語化した文芸である。そして、前田愛は、アメリカの批評家 R･D･ブラックマーの論を引用し、「言語というものは身体に根をもっている、そして身ぶりによって精気づけられているのだが、その身ぶりに支えられない言葉は、ちょうど植物のように、枯れてしまわないまでも朽ち果ててしまう」と言葉と身体の関連性を説明している[33]。もちろん、俳句も言語表現の一つの手段として動作や身体感覚に深く依拠している。そのよ

[32] 芥川龍之介「冬心」(全集第 22 巻、pp.394-399)。引用は 1-b の草稿による。
[33] 前田愛『増補　文学テクスト入門』第三章「言葉と身体」(ちくま学芸文庫、1993 年、pp.67-71)。

うな観点から、ここでは、芥川がわが身を持って知覚した日常を書きとめた句を、「五感」の感覚表現を手掛かりに論じることとする。

まず、外界を認識するに当たって五感の中で最も重要な感覚は視覚であり、芭蕉の伝統から「眼前」、「嘱目吟」などが作句において手法の一つとして用いられてきた。また、芥川は、色彩豊かな句や鮮やかな花火をテーマとする句を多く詠んでおり、視覚表現に訴える作品が非常に多いことが特徴の一つとして指摘できる。そして、今日では「写生」が俳句における基本的な作句態度の一つとなっていることもあり、五感の中で視覚に基づいて対象を捉えて表現する俳句が多いのはむしろ当然というべきで、芥川も例外ではない。これらの点を踏まえ、ここではまず、五感の中から視覚の句を 2 句挙げて見て行きたいと思う。

641 野茨にからまる萩の盛りかな[34]

この句は大正 9 年 10 月 12 日付けで下島勲に宛てた書簡に記されているもので、「澄江堂句抄」(『にひはり』大正 13 年 5 月号）には「相模駅にただ見たるままを」と前書を付与してある。また、「我鬼抄」、「蕩々帖」、『澄江堂句集』などにも収録されていることから、芥川がどれほどこの句を愛吟していたのかが分かる。そして、野茨に絡む萩の茂みの生命力を目にし、それを率直に俳句という形に言語化するという素材の扱い方は、彼の目指す素朴で単純な句境といえ、芭蕉の唱導する「軽み」の境地に通じているものがある。

1134 雪どけの中にしだるゝ柳かな[35]

この句は『澄江堂句集』に収録された 77 句のうちの最後の一句で、「旭川」と前書を付してある。芥川は、改造社の要請に応じて昭和 2 年 5 月に里見弴と共に東北・北海道の講演に出掛けており、この

[34] 大正 9 年 10 月 12 日付けの下島勲に宛てた書簡（全集第 19 巻、p.105）。
[35] 昭和 2 年 6 月 14 日付けの西村貞吉に宛てた書簡（全集第 20 巻、p.301）、同 21 日付けの小手川金次郎に宛てた書簡（全集第 20 巻、p.302）に見られるほか、「講演軍記」(『文芸時報』昭和 2 年 6 月号収録）、『澄江堂句集』にも収録されている。また、初案と思われる「1131 ひつじ田の中にしだるる柳かな」(5 月 24 日付けの室生犀星と小室隆一のそれぞれに宛てた絵葉書、前書「北海道」）の句形もある。

一句は、その際に訪れた北海道において目にした北国の景色を詠んだ作品である。作中の「しだるゝ」は「枝垂れる」のことで、長くたれ下がる意であるが、ここでは、北海道の遅い雪解けの中に芽吹く瑞々しい柳の若葉を嘱目し、北海道の遅き春の到来を実感すると同時に新しき生命の息吹が感じられる、という意であり、旭川の町を散策中に目にした光景を心の中で深化させて句にしたのであろう。そして、この句について加藤郁乎は「雪国でなくしては吐けぬ率意の俳味、我鬼の生まれ育った東都大川べりでは望めそうにない古淡の俳味と云い足してもよいだろう」と評し、芥川の晩成の句境の代表作であるとしている[36]。

以上の 2 句は、視覚表現を主とする嘱目吟として取り上げたが、続いて、聴覚の作品を紹介しておきたい。まず、大正 12（1923）年 9 月の関東大震災後に詠んだ句である次の一句を挙げる。

891 松風をうつゝに聞くよ古袷[37]

この句について、「澄江堂句抄」には、「大震の後、偶芝山内を過ぎ、萬株の長松の恙なかりしを見る。宛然故人と相逢ふが如し。欣懐自ら禁ずること能はず」との、また、『澄江堂句集』には、「震災の後増上寺のほとりを過ぐ」との前書が付与してある。関東圏に大きな被害をもたらした関東大震災は、今なお人々の記憶に残っている災害である。また、今年（2011 年）3 月 11 日に発生し、東日本を中心に大きな被害を与えた東北地方太平洋沖地震も記憶に新しい。その東北地方太平洋沖地震における津波で、7 万本の松を有する岩手県陸前高田市の名勝地「高田松原」も壊滅的な被害を受けた。そして、ほぼすべての松がなぎ倒され流されたその地で、ただ 1 本の松だけが倒れされることがなく高々と聳え立っており、勇気と希望を与える出来事として、その松は「希望の松」と命名されたという。

---

[36] 加藤郁乎編『芥川竜之介俳句集』（岩波書店、2010 年、p.218）。

[37] 『にひはり』大正 12 年 12 月号の「澄江堂句抄」による。また、大正 12 年 12 月 16 日付けの室生犀星に宛てた書簡にも見える。なお、「澄江堂雑詠」では「1071 松風をうつつに聞くよ夏帽子」と下五が「古袷」から「夏帽子」へと推敲されている。

ただ、この松も、根の部分が塩分に侵されたことなどにより、立ち枯れ状態となり、保護や再生が困難であると言われており、大自然を相手にした人間のちっぽけな営為の無力さのようなものを感じる。しかし、例え、その松が枯れたとしても、被災した地元の人々はもちろん、多くの人に励みと希望を与えたであろう。そして、関東大震災の後、町の様子が気になって出歩いたことを「大震日録」として記した芥川も、また、同じような気持ちを持ったのではないだろうか。町は見るも無残な光景になっていたが、増上寺門前の「萬株の長松」は地震の揺れに倒れることなく屹立していたのである。そして、芥川は、夢見心地に松風を聞きながら、焦土と化した町の様子や多くの尊い命が奪われたことを思い浮かべていたのであろう。

また、この句は、芭蕉の「猿を聞く人捨子に秋の風いかに」の句境に似ていることを指摘しておきたい。芭蕉の句は、猿の声に悲愁を聞く詩人たちに秋風の中に泣く捨て子の声がどのように聞こえるかと問いかけているのに対し、芥川は秋の松籟を半分放心状態で聞いているのである。つまり、これらの 2 句には「聞く」という動作を通して命あるものを哀れ悲しむという、憐憫の情がその根底に流れているのである。そして、次に示す一句も「聞く」に重点を置いた作品であるが、ここではその聴覚表現に注目したい。

606 草庵や秋立つ雨の聞き心[38]

この句は、大正 9（1920）年 4 月 9 日付けで、当時の『中央公論』編集長である瀧田哲太郎に送った書簡に見られるものである。芥川は、同年の『中央公論』4 月号に小説「秋」を発表しているが、この一句は小説「秋」の発表挨拶も兼ねていると考えてよかろう。そして、小室義弘は「文人風雅芥川我鬼」において、「掲出の一句は、家にいて、ひっそりと雨の音に耳を澄ましつつ、しみじみと立秋の

[38] 大正 9 年 4 月 9 日付けの瀧田哲太郎に宛てた書簡（全集第 19 巻、p.42）。また同日付けの瀧井孝作に宛てた書簡には「『秋』を読む」と前書し、この一句を書き送っている。

気配を感じとる趣。四月であるのに、ことさらに「秋立つ」といったのは、小説「秋」のが世に出ることにかけているからである。「聞き心」に巷の反響を待つ思いが託されている[39]」と解説しているが、いかにも的を射た見解であるといえよう。また、大正 9（1920）年 4 月 15 日付けの小島政二郎に宛てた書簡にも、「或男「秋」の悪口を云つて来る貴様にはわからないのだと返事をする[40]」と前書を付してある「618 幽石を知らず三竿の竹の秋」の句が記されており、芥川がいかに「秋」の評判を気にしていたかが垣間見られよう。

この、「雨の聞き心」という表現は、芥川の「295 敲詩了芭蕉に雨を聴く夜あらむ」の句とともに、芭蕉の「芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな」を意識して詠んだ句であろう。つまり、芭蕉の「盥に雨を聞く夜」を、芥川は「芭蕉に雨を聴く夜」と置き換えているもので、606 の「草庵や」の句も芭蕉の句が意識下にあったと思われる。芭蕉とその門人の句をこよなく愛した芥川は、本句取り、つまり古人の作品を下敷きに句を作っており、例えば、小説『河童』において芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」を取り上げ、「蛙」を「河童」に置き換えたら一層光彩陸離、と茶化している。さらに『点鬼簿』には、芭蕉の弟子である丈草の「かげろふや塚より他に住むばかり」を引いて「僕は実際この時ほど、こう云う丈艸の心もちが押し迫つて来るのを感じたことはなかった」と締めくくっており、この丈草の句の影響を明らかに受けたであろう「900 かげろふや影ばかりなる仏たち」を詠んでいる。このように、古人の句境を学び、それに自身の思いを重ねて新しい現実をわが物にするというのが、芥川の俳句の創作手法の一つといえるのである。

ここまで、視覚と聴覚の句を見てきたが、続いて、嗅覚・触覚・味覚の表現に基づく句をそれぞれ一句ずつ取り上げて論じることとする。

---

[39] 小室善弘「文人風雅芥川我鬼」（菊池弘編『日本文学研究大成　芥川龍之介Ⅱ』所収、国書刊行会、1995 年、pp.238-275）。
[40] 大正 9 年 4 月 15 日付けの小島政二郎に宛てた書簡（全集第 19 巻、pp.46-48）。

883 唐黍やほどろと枯れし日のにほひ

この句は、「澄江堂句抄」に「鎌倉なる三汀を訪ふ。夜は何の風情もなけれど、庭の外なる砂畠の秋の色のおもしろかりければ」と前書きがあり、『澄江堂句集』には中七が「ほどろと枯るる」の形で収録されている。「ほどろ」は「はだら」の意で、ここでは穂が伸びすぎてほおけた様を指すが、芥川は、枯れたトウモロコシのほおけた穂に「日の匂い」を感じ、句にしたのである。そして、この「日の匂い」とは、日常的な些事においてふっと感じる夏の匂いであり、また、枯れた植物が、夏特有の日差しの強さを感じさせてくれる様子を表しているものであろう。

894 初秋の蝗つかめば柔かき

この句も『澄江堂句集』に収録された一句で、また「澄江堂句抄」には上五が「初秋や」として、「蕩々帖」には中七が「握れば」としてあり、推敲を重ねた結果、「初秋の蝗つかめば柔かき」に落ち着いたものと思われ、このような推敲の過程が、芥川の俳句に対する繊細な拘りを語っているともいえる。秋は収穫の季節であり、蝗（イナゴ）の発生する時期でもある。そして、「初秋」と形容された蝗は、まだ成虫になったばかりであり、本来ならば堅いはずの胸の部分がまだ十分に堅くなっていなかったことへの驚きを詠んだのがこの句で、指の感触を通して初秋の到来を強く意識させられたことを表現しているのである。

最後に味覚の句についてである。芥川の句には食べ物を題材としたものも少なくない。ただ、その多くは知人からもらい、もしくは知人に送る場合に詠んだ挨拶の贈答句であるが、ここでは、直接に味覚の表現が読み取れる作品として、次の一句を紹介しておく。

693 燕や食ひのこしたる東坡肉

この句は、芥川が大正 10（1921）年 5 月 5 日に、上海から江口渙、下島勲の二人に送った絵葉書に記されている句である。このうち、下島勲への絵葉書では、芥川が中国旅行中に詠んだこの句の後に続けて「東坡肉と云ふ料理が脂つこい所を見ると東坡も今の支那人の

やうに脂つこいものが好きだつたのでせう[41]」と記している。東坡肉（豚の角煮）は、上海料理の特徴を色濃く残す料理の一つであり、宋の著名な詩人であった蘇東坡の創作手料理と言い伝えられている。そして、この一文と句を合わせて見ると、芥川は東坡肉の脂っこさに閉口し、出された東坡肉を食べきれずに残したようである。また、季語は「燕」で、一句は十六音の字足らずとなるが、このような調べを有する句に「1091 兎も片耳垂るる大暑かな」がある。

五、おわりに

中村草田男は、「俳人としての芥川竜之介」の一文において、「芥川は俳句を真に愛してゐた。或る雑誌から需められた略歴風の文章の中には、「余技は発句の外には何もない。」と答へてゐる。唯一つの余技は、余技以上の意味を持つてゐたであらう」と評している[42]。また、同論文では芥川龍之介の随筆「軽井沢の一日（仮）[43]」の一節を紹介し、自分の句に対する芥川の思いを次のように評している。

> 「その晩 R 氏が自分（論者注：芥川）の俳句の悪口を言つたので、自分は怒つて、R 氏の銅色の頬をぴしやぴしや打つた。（中略）そんな夢を見た。さめたあとも変な気持がして不快だつた。」余技と銘うつてゐるもののそれに第一義的価値を置いて居たれば（ヴ）こそ（彼は独逸人が Dichter といふ場合のやうに、広い根本的な意味での「詩人」に、自己の誇りの本拠を置いて居たやうである）たとへ夢中の世界に於てでも、他人の非難の言辞はかくまで聞き捨て難かつたのであらう[44]。

たとえ夢の中でも自分の句が悪く言われたことに芥川は激怒する、というこのエピソードからも、彼がどれほど俳句を愛し、また、自

---

[41] 大正 10 年 5 月 5 日付けの下島勲に宛てた書簡（全集第 19 巻、p.168）。
[42] 中村草田男「俳人としての芥川龍之介」（吉田精一編『芥川龍之介全集　別巻』所収、筑摩書房、1971 年、pp.198-210）。
[43] 「軽井沢の一日（仮）」は大正 14（1925）年 8 月に避暑のために軽井沢に滞在した時の日記である。原資料の表題は「軽井沢日記」であるが、ほかに大正 13 年の作品「軽井沢日記」があるので、岩波版全集 23 巻では「軽井沢の一日（仮）」と表題を付けて区別している。本論は岩波版全集の表記に従う。
[44] 注 43 前掲論文参照。

分の作品に誇りを持っていたのかがうかがえるといえよう。

そして、萩原朔太郎は芥川の俳句について、「彼の詩文学は、生活がなくて趣味だけがあり、感情がなくて才気だけがあり、ポエヂイがなくて知性だけがあるやうな文学なのだ[45]」と評している。また、芥川の小説家の冷静さと、同時に詩人的情熱をあわせもつ矛盾に対する朔太郎のこの疑問について、嶋岡晨は「この「詩を情熱してゐる小説家」(論者注:芥川を指す)の機智的表現を認めず、それを非詩人の作物とする朔太郎と、詩(詩人)観の違いがあった」と指摘し、さらに、芥川の死後に、朔太郎の評言が微妙に変化したことについて、次のように述べている。

> (朔太郎は)芥川の自殺後は、その文学的生涯を「死を賭したる『彼自身への戦ひ』と見なし、「彼が実に書かうとしたものは、……真の意味での『詩』であった」(「芥川龍之介の死」)と告げたのだった[46]。

このように、朔太郎は、詩に対する芥川の情熱を認めながらも、彼の詩に内包される、小説家であるが故の冷静過ぎる一面に違和感持っていた。しかし、上掲の嶋岡晨の指摘のように、朔太郎の芥川に対する〈非詩人〉観は、芥川の文章を優れた散文詩とも評したことで「より複雑な色合いを帯びて」いるのも、また、事実であろう。

このように、芥川は、詩の中でも、特に俳句に対して特別な思いを持っており、小説家としての自分の余技は俳句であると明言したことは最初に触れた通りである。また、彼が大正 11 年に友人に送った書簡で「中央公論おんめにかけ候小生の歌は平福、安田両先生などと比べずに谷崎、田山両先生と御比べ下され度その方小説家同志故公平に候句は虚子と比べられてもよろしく候[47]」(香取秀真宛)、「また僕の余技に関する意見、これは全部不賛成です、僕歌は稽古

---

[45] 萩原朔太郎「小説家の俳句　俳人としての芥川龍之介と室生犀星」(『日本の名随筆　別巻 25 俳句』所収、作品社、1993 年)。

[46] 嶋岡晨「芥川〈非詩人〉観」(全集第 18 巻収録月報 18、1997 年 4 月、pp.1-4)。

[47] 大正 11 年 3 月 19 日付けの香取秀真に宛てた書簡、全集第 19 巻、p.242。平福は平福百穂、日本画家でアララギ派の歌人でもある。安田は安田尚義、歴史学者・歌人。谷崎は谷崎潤一郎、田山は田山花袋、小説家。

した事がない故アララギの投歌者の一人にもなれる自信なしされど句は人並みに苦労してゐる故虚子と比較されてもよろしい[48]」（渡辺庫輔宛）と語っている。この 2 通の手紙に出ている「中央公論」、「僕の余技」というのは、『中央公論』大正 11 年 3 月号の「詞華」欄に、大見出しとして掲げられている「現代芸術家余技集」に発表された「我鬼抄」のことで、芥川は、終生、俳句に格別の思い入れを持ち続け、こういった友人への書信においても、しばしば自分の俳句観を吐露している。そして、以上に挙げた 2 通の書簡で述べているように、自分の俳句を天下の大御所である高浜虚子と比べてもよいといったことから、俳句に対する彼の自信と情熱のほどがうかがえるのである。

このほか、『芥川竜之介俳句集』（岩波書店）の著者加藤郁乎も、芥川の俳句について「首尾一貫して文体にこだわった小説家の俳句、スタイリストによる舌頭百転の末の産物に外ならない。自選七十七句を収めた『澄江堂句集』は近代文人のなかで際立っている」とし、江戸っ子としての芥川の俳味の根源といったような点について、次のように語っている。

> 澄江堂俳句の深みには江戸趣味ゆたかの大きな川が淡々と流れている。その底に見え隠れするのは技巧や機智ではなく、もって生まれた江戸伝来の俳味であろう。澄江堂の句には細み、軽み、戯作調などみんな仕込まれてある[49]。

つまり、加藤郁乎の指摘によれば、芥川の俳句は、文人（小説家）の俳句に属するもので、その句には専業俳人のように魂を打ち込んだ表現こそあまり見られないものの、句を詠むことに情熱を燃やした苦心惨憺の痕跡は随所見られるものである。また、彼の俳句の多くは、私信などの私的領域に付されることが多く、特に、横浜での教職生活における東京に帰りたいという望郷の念が、彼の俳句創作欲を著しく刺激し、後に小説家として成功した芥川の、もう一つの

---

[48] 大正 11 年 4 月 8 日付けの渡辺庫輔に宛てた書簡、全集第 19 巻、pp.249-250。
[49] 加藤郁乎「澄江堂の俳味」（全集第 24 巻収録月報 24、1998 年 3 月、pp.1-4）。

顔をうかがわせるものでもある。そして、自らを「澄江堂」と号した芥川は生来の東京人であり、「もし自分に「東京」のにおいを問う人があるならば、自分は大川の水のにおいと答えるのになんの躊躇もしないであろう。ひとりにおいのみではない。大川の水の色、大川の水のひびきは、我が愛する「東京」の色であり、声で」あると「大川の水」（岩波全集第 1 巻所収）に記している。このように、東京を愛した彼の生活の底には、常に大川（隅田川）が流れており、これは、「余技」に過ぎぬ文人（小説家）の俳句に、「江戸趣味ゆたかの」と「澄江堂俳句の深み」を持たせる源であったのかも知れない。

以上、本稿は、まず、芥川の俳句歴に触れた上で、具体的な句の分析として、主に「隠遁への憧れ」、「病」、「感覚表現」の三つの面から考察したものである。確かに、彼の有名句の多くは、技巧の面において評価されるものが多い。しかし、以上に紹介した作品のように、日々つれづれに思いのままを書き記した句、例えば、隠遁に対する憧れや自身の病についての赤裸々な告白や、身体に基づく感覚表現などは、技巧の面で評価された句とは明確に一線を画す切実な内容を持つものといえ、芥川の違った一面を垣間みられるようにも感じられ、注目に値すべき部分は多いと思う。なお、本稿がテキストとして用いる加藤郁乎編『芥川竜之介俳句集』（岩波書店）は、芥川の俳句を千句以上集めた労作であり、本書に基づき、さらに芥川の句を題材ごとにカテゴライズし、内容の分析を深めていくことを今度の課題としたい。

付記：本稿は、2011 年 5 月 7 日、淡江大学で開催された「芥川龍之介與東亞國際學術研討會」における発表「芥川龍之介の俳句に関する一考察—「隠遁への憧れ」と「病」の句について—」をもとに、大幅に加筆・修正を加えたものである。

テキスト

岩波書店刊（1998）『芥川龍之介全集』新版全集第 2 次刊行全 24 巻
加藤郁乎編（2010）『芥川竜之介俳句集』岩波書店

参考文献

加藤郁乎（1998）「澄江堂の俳味」『芥川龍之介全集』第 24 巻月報、岩波書店
小室善弘（1995）「文人風雅芥川我鬼」『日本文学研究大成　芥川龍之介Ⅱ』菊池弘編、国書刊行会
斉藤英雄（2009）「龍之介の『ホトトギス』投稿句について」『漱石・龍之介の俳句』所収、翰林書房
嶋岡晨（1997）「芥川〈非詩人〉観」『芥川龍之介全集』第 18 巻月報、岩波書店
関口安義（1992）『芥川龍之介の手紙』大修館書店
中村草田男（1971）「俳人としての芥川龍之介」『芥川龍之介全集　別巻』吉田精一編、筑摩書房
西谷碧落居（1932）『俳人芥川龍之介論』立命館出版部
萩原朔太郎（1993）「小説家の俳句—俳人としての芥川龍之介と室生犀星—」『日本の名随筆　別巻 25　俳句」金子兜太編、作品社
前田愛（1993）『増補　文学テクスト入門』ちくま学芸文庫
宮坂覚（1998）「年譜」『芥川龍之介全集』第 24 巻、岩波書店
村山古郷（1973）『俳句シリーズ　人と作品 14 文人の俳句』桜楓社
村山古郷（1977）「我鬼珠玉—芥川龍之介の俳句—」『日本文学研究資料叢書　芥川龍之介 II』日本文学研究資料刊行会編、有精堂
吉田精一（1979）『吉田精一著作集第一巻　芥川龍之介Ⅰ』桜楓社